

One's way 構文の発達に関する史的コーパス研究

本多尚子

1. 導入

英語には、(1)に見られるように動詞の直後に one's way という句が後続する構文が存在する。

(1) a. Jim made his way through the crowd.

b. I was wearing, like, five-inchers and I'm working my way up.

c. Bill belched his way out of the restaurant.

(Jackendoff (1990: 211))

特に、この one's way という句は、(1a)で示されるように他動詞の直後といった項位置ではもちろん、(1b)や(1c)のような自動詞の直後といった付加詞位置にも現れることができるという点で特異であり、こうした特徴的語句を含んでいることから、(1)は one's way 構文と呼ばれる。また、当該構文は、含まれている動詞が移動を表す動詞ではないにもかかわらず、移動の存在を強く含意する構文として知られ、そうした解釈も one's way という句及びそれに後続する前置詞句や不変化詞の存在と関連があるのではないかと指摘されている。

さらに、(1)のような one's way 構文は、3つの下位タイプに分類できるとされる。その下位タイプとは、(1a)のような、道を得るための手段を表す動詞を含む「手段の one's way 構文」、(1b)のような、道の移動を表す動詞を含む「移動の one's way 構文」、そして、(1c)のような、道をどんな様子で移動するのかを含む「様態の one's way 構文」である。

また、通時的観点から one's way 構文を見ると、以下の3つの疑問が生じる。その疑問とは、①英語において one's way 構文自体はいつ初出したのか、②one's way 構文の下位3タイプはそれぞれいつ初出したのか、③(①及び②のような) 前述の変化を引き起こした要因は何であり、その結果、それぞれの文はどのような統語構造を持つに至っているのかである。

本稿では、史的コーパスを用いた one's way 構文に関する調査結果を示し、それを理論的に説明可能な意味的・統語的分析を提案することにより、前述の3つの疑問の解明を試みる。

2. One's way 構文に関する通時的データ

史的コーパス調査の結果、14世紀後半から16世紀後半までにおいて、唯一現れる one's way 構文は take one's way to/toward 句であり、次いで16世紀後半から17世紀初頭に find one's way out という構文が出現することが分かった。さらに、17世紀初頭から18世紀初頭になると、make one's way to/in/over/into 句という「手段の one's way 構文」が出現し始め、18世紀初頭から18世紀後半になると、force one's way to/into 句といった one's way 構文が、18世紀後半以降になると、work one's way up 句といった one's way 構文が出現すると示された。

3. One's way 構文の通時的発達に関する意味的・統語的分析

14世紀後半から16世紀後半までにおいて、唯一現れる one's way 構文は(2a)のような take one's way to/toward 句であり、(2b)の統語構造を持つ。

(2) a. and toke his way toward þe castel;

(CMBRUT3,67.2008)

b. [_{NP} [_v* v* [_{VP} [_v toke] [_{DP} his way]]] [_{PP} toward þe castel]]

take one's way to/toward 句は、字義通りの意味であるというよりはむしろ「～へ/に向かって我が道を行く／～へ/に向かって出発する」という意味を持つイディオム表現である。そして、このイディオム的な意味は、字義通りの意味、すなわち、「～へと/に向かう自身の道を選びとる」という意味から、「～へと/に向かう道を選びとったのなら、その後はその道を進み目的地へ行く」という一般的含意が生じることにより導かれると考えられる。特に、重要なのは、「道を選びとる」ためには(目的地へと向かう)いくつかの候補となる「既存の」道が必要であることと、そして、このような「岐路に立つ」ことは動作主にとって「困難」をもたらす場合が少なからずあり得るということである。また、one's way 句が示すのは、「候補となる既存のいくつかの道の中から自分が選びとった道」であり、現実世界における実体を持つものである。特に、本分析では、当該イディオムがプロトタイプとして存在したことこそが、その後の one's way 構文の発達の方向性に重要な影響を与えたと主張する。

16世紀後半から17世紀初頭までは、take one's way to/toward 句に加え、(3a)のような find one's way out

という構文のみ観察される。(3a)の統語構造は(3b)として示される。

- (3) a. I should bring my wits into an intricate Labyrinth, that I should hardly finde my way out,
(JOTAYLOR-E2-P1,3,87.C1.342)

b. [_{VP} [_{v*} v* [_{VP} [_v finde] [_{DP} my way]]] [_{PrTP} [_{Prt} out]]]

特に、(3a)において「ほぼ外への(自分が出るための)道を見出せないであろう迷宮」という文脈であることに注目すると、take one's way to/toward 句の場合のような、はっきりと視界に見えるいくつかの既存の道や岐路に立つことで生じる困難とは異なるものの、find one's way out の事例においても「既存の」道は存在しており、迷宮を脱出しなければならない状況そのものが「それに伴う困難」と「(脱出のために)その道を進む」という一般的含意をもたらしている。従って、find one's way out もイディオム表現タイプの one's way 構文の一種と考えられる。

17世紀初頭から18世紀初頭になると、make one's way to/in/over/into 句という、「手段の one's way 構文」が出現し始める。その用例及び統語構造を(4a,b)として示す。

- (4) a. so that unless you have some to make your way through them, (FRYER-E3-P2,1,212.52)

b. [_{VP} [_{v*} v* [_{VP} [_v make] [_{DP} your way]]] [_{PP} through them]]

イディオム表現タイプの one's way 構文と、(4a)タイプの one's way 構文との間の大きな違いは、前者は、「既存の道」を何らかの困難を伴って進むという意味を表すのに対し、後者は、既存の道がない状況で、「〜へ着く/〜を越えるための新しい道を作ってそこを進む」という意味を表していることである。Ishizaki (2013)で指摘されているように、「既存の道がない状況で(〜へ着く/〜を越えるための)新しい道を作る」ということは、「困難の克服」を含意する。本研究では、この「困難の克服」という含意の存在こそが、イディオム表現タイプの one's way 構文に含まれる take や find から始まる一連の動詞の語彙拡散につながったと考える。また、「手段の one's way 構文」における one's way 句は、既存の道ではないものの、「新たに創造した道そのもの」は動作主の移動後も現実世界に残存し続けるものである点も重要であり、こうした道を「創造」する際には一定の時間を要するという一般的含意を伴うことも注目に値する。

18世紀初頭から18世紀後半になると、(5a)のような force one's way to/into 句タイプの one's way 構文が出現し始める。その統語構造が(5b)である。

- (5) a. and the enraged soldiers were forcing their way into his tent, (GIBBON-1776,1,372.291)

b. [_{VP} [_{v*} v* [_{VP} [_v forcing] [_{DP} their way]]] [_{PP} into his tent]]

force one's way to/into 句では、「〜へ押し入る」、すなわち、通行不可能な箇所を自らの力づくで「一時的に」通行可能にしたに過ぎず、make などと違い新たに現実世界における道を創造したわけではない。また、「押し入る」というのは、make などの創造動詞と違い、瞬間的なイベントであり、押し入る前に当該地点へたどり着くまでの移動とは直接の因果関係はない。すなわち、ここでの one's way は現実世界における具体的な実体というよりはむしろ、動作主の認識世界のみが存在するかなり抽象的な性質を帯びたものと考えられ、one's way 句の持つ意味がかなり漂白化されていると見ることができる。こうした one's way 句の意味の漂白化が、付加詞としての one's way 句の出現につながったのではないかと本稿では指摘する。

force one's way to/into 句のように、抽象的な「道」の拡張をもたらす瞬間的なイベントと one's way 構文との間の結びつきが生じたことで、当該イベントを繰り返すことにより、動作主の認識世界上に「道らしきもの」が生じ、そこを移動するという解釈可能性も生じうる。実際、18世紀後半以降、(6)のような work one's way up という用法が生じ、「苦労して徐々に進む」など、瞬間的な動作や行為を繰り返すことで動作主の認識世界上に「道らしきもの」を出現させ進むという意味を表している。これらは、(1b)のような「移動の one's way 構文」の一種と考えられる。また、(7)で示されるように one's way は付加詞として機能している。

- (6) for the near side, work your way up in all parts as before, (SKEAVINGTON-184X,21.C2.210)

(7) [_{VP} [_v v [_{VP} [_v work]]] [_{DP} your way] [_{PrTP} [_{Prt} up]]]

本稿分析を仮定すれば、Jackendoff (1997)で指摘されている one's way 構文とこうした瞬間的なイベントの繰り返し解釈との関連性も理論的に説明可能となる。コーパス調査の結果発見されなかった「様態の one's way」出現時期の同定及びその統語構造の解明については今後の研究課題とする。

参考文献

- Ishizaki, Yasuaki (2013) "On the Initial Development of the *One's way* Construction: A Construction Grammar Perspective," *IVY* 46, 49-73.
Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*, MIT, Cambridge, MA.
Jackendoff, Ray (1997) "Twistin' the Night Away," *Language* 73, 534-559.